

5. 教室における脾スキャング脾クレアラ ンスの経験

長谷川真 岩崎一郎 兵頭浩一郎

尾崎幸成 名和英明

(岡山大学 平木内科)

^{51}Cr 標識加熱処置赤血球により19例, ^{203}Hg MHP 法により9例の脾スキャング, 体外計測, クレアランス測定を行なった. スキャングでは ^{203}Hg MHP法は ^{51}Cr 法に比し, 脾像を明確にえられ, 脾像出現は全例に認められ肝像出現率は低くより優れている. 再生不良性貧血では ^{51}Cr 法では体外計測で脾の摂取が少なく肝の摂取が高く, 肝/脾比は高値でクレアランス(血中の半減時間は延長している. ^{203}Hg MHP 法でも肝/脾比は高値で, この疾患では脾の障害赤血球摂取能は低く脾の網内系機能は低下していると思われる. 真性多血症, 敗血症, 急性リンパ性白血病, ホシキン病等脾に病変を伴なう疾患では肝/脾比の高値あるいはクレアランスの延長がみられ, 脾の機能低下が推測される. 慢性骨髄性白血病ではクレアランスは著明に延長し, しかも肝/脾比は低値で, 肝, 脾ともに障害赤血球摂取能の低下が推測される.

質疑応答: 長谷川 真 ①便に潜血がある時影響はないか.

答: 赤血球寿命の場合と異なり, 静注後1~2時間でシンチ, クレアランス等をするので影響はまったくない.

②脾クレアランスという言葉はおかしい.

答: 肝によってもクレアされる部分もあるから正確には先生のいわれるように脾肝クレアランスといったほうがよいかも知れない.

③MHP 法による肝像出現について.

答: Cr 法と異なり Hg 法は操作上の影響はまったくないので, 脾の摂取が少ないかまたは肝の摂取が絶対的または相対的に多いものと考えられる. 再生不良性貧血において Cr 法で肝像出現が多かったが Hg 法でも4例中2例に出現している.

*

6. 各種疾患における ^{131}I -triiodothyronine resin sponge uptake および ^{131}I -thyroxine 血漿蛋白結合率について

安部喬樹

(鳥取大学 浅越内科)

^{131}I -triiodothyronine resin sponge uptake test は従来の甲状腺機能検査法に比較して簡便で, しかもその成績が甲状腺機能をよく反映する点において, すぐれている. しかしながら, その値は甲状腺機能異常以外にも, 若干の疾患で異常値をきたす可能性がある. このような疾患では, 肝疾患において異常値を示すものが多く, ことに急性肝炎の初期にしばしば低値をとることをみた. また, ある種の薬物は thyroxine binding protein と甲状腺ホルモンとの結合を障害し, resin sponge uptake の上昇をきたすことが実験に知られている. このような薬物を投与中の症例で検討した結果では, 異常高値を示すものが, ほとんどないことを知った. つぎに, われわれが検討した ^{131}I -thyroxine 血漿たんぱく結合率が甲状腺機能を正しく反映することを示し, さらに, 甲状腺機能異常以外の疾患では resin sponge uptake と同様, 肝疾患において異常値をみた.

*

7. ^{14}C -Dieldrin のマウス体内分布について

岩崎一郎 兵頭浩二郎 名和英明

西岡康弘 森定 敬 角 一雄

(岡山大学 平木内科)

有機塩素系殺虫剤で, Drin 剤の一種である ^{14}C -Dieldrin を用いてその maus 体内分布を追求した.

〔実験方法〕 ^{14}C -dieldrin 0.1 $\mu\text{Ci/g}$ を成熟雄性マウスに経口投与し, 1.5, 3, 6, 12, 24時間後, 2, 4, 46日後に屠殺し脳, 心, 肺, 肝, 脾, 腎および脂肪組織として大網を取り出した. これら各臓器は秤量ののちホモゲナイズし, 分液ロートにて benzene で抽出を行ない, 40°C 減圧下で蒸発乾固してのち, toluen scintillator に溶解し島津製液体シンチレーションカウンターで計測した.

〔結果〕 dieldrin は比較的早期に各臓器に吸収され, とくに肝に著明に取り込まれることがわかった. 一方本中毒の主要症状が, 発病の早期から終始中枢神経系の興奮, 刺激症状を主徴とするにもかかわらず, 脳中には早期から認められたが他の臓器に比較してとくに高い値はとらず, 時間とともに増加する傾向がみられた. しかし, いずれの臓器でも46日後にはわずかに痕跡を認めるに過ぎなかった.

*